

オギュスト・クフェル考序説

清水 克 洋

目 次

はじめに

第1節 フランス初期労働組合運動における改良主義的潮流の位置

第2節 A.クフェルの人物像——後世の評価

第3節 A.クフェルの人物像——同時代の評価

おわりに

はじめに

今日の日本において雇用、労働問題は報道されない日がないほど深刻な様相を呈している。いわく、非正規・不安定雇用の増大、新卒者の就職難、長時間労働・過労死。この雇用・労働条件の劣悪化は、現れ方の違いはあれ、全世界に共通する問題である。世界史を振り返ると、イギリスに始まる産業革命以降、工業化の進展による雇用関係の広がり、それによって生じた様々な問題を社会が解決すべきであるとの認識を一般化させ、工場法など国家による介入、対応に結果した。また、労働者自身による組織化と労働条件改善の運動が進展し、国家介入を促す重要な契機ともなった。第二次世界大戦後には、労働政策、社会政策が拡充整備され、いわゆる福祉国家が世界的な共通目標とされ、労働組合は大きな役割を担うアクターとなった。しかし、世界経済の停滞から過度な国家介入を批判する新自由主義が台頭し、福祉の見直しが始まるとともに、労働組合を既得権擁

護の集団とみなす論調が強まり、各国で労働組合は組織率を下げ、雇用・労働政策、社会政策への影響力を著しく低下させている。今、あらためて労働組合は何であったのか、将来何でありうるのかが問われていると言ってよい。本稿は、この問題に正面から取り組むものではないが、19世紀末から20世紀初頭フランスにおける労働組合運動の中で、注目されることが少なかった改良主義的潮流を検討することで議論の手掛かりを得ようとするものである。

これまで、我が国においては、そしてフランスにおいても、初期労働組合運動への関心はおもにその革命的潮流に向けられてきた。「社会主義」国家の成立、また、1970年代における社会変革への展望という時代状況からすれば自然なことであり、今日なお参照すべき視角でもある。しかし、ソ連、東欧社会主義の崩壊、先進国における社会主義的社会変革の見通しの消失を考慮すれば、これまで、必ずしも強い関心に向けられてこなかった改良主義的潮流についての再考察が重要性を帯びることになる。この潮流は、フランス初期労働運動において、通常考えられる以上に有力であり、後の時代への影響も大きく、フランスではその見直しが進められている。我々は、その中心となった書籍労連¹⁾、とくにその書記長オギュスト・

1) *Fédération française des travailleurs du livre*. 我が国においては、出版印刷労連（喜安朗）、書籍労連（谷川稔）、出版印刷連盟（大森弘喜）、出版労働者連盟（高井哲彦）の訳がある。組合員の構成などを考慮した結果であるが、ここでは直訳に近い書籍労連を採用する。厳密には、設立当初は *Fédération des ouvriers typographe français et des industries similaires*. すなわち植字工と関連産業労働者組合とされていた。1885年の第3回大会での規約改正によって、植字工が中心である名称から、製本にかかわる全ての労働者の組合であることを示す *Fédération française des travailleurs du livre* に変更された。ただし、機関誌は発足当時から *La Typographie française* であり、ようやく1920年に *L'Imprimerie française* に変更された。組合員数等から見て植字工中心は変わらず。

クフェルに焦点を当てて、再検討に加わろうとするものである。何故、フランスの労働組合運動のいわば生成期に限定するのか。また、その時期の改良主義的潮流のうちでも、書籍労連の指導者であった A. クフェルを主な対象とするのかについて、まず、フランス初期労働組合運動に関する研究史を総括して、明らかにする。ついで、そこから得られる分析視角に基づき A. クフェルについてのこれまでの評価を整理して、その全体像再構成の序とする。

第1節 フランス初期労働組合運動における改良主義的潮流の位置

D. アンドルファットと D. ラベは、フランスにおいて革命的労働組合運動の路線を定めたアミアン憲章100年後に出版した『組合の歴史』²⁾で、強い口調でこれまでの研究史を総括する。すなわち、1914年以前、全ての組合活動家は、プロレタリアートの解放という組合活動の革命的目的で共通していたが、その手段において二つに分かれていたと。まず、A. クフェルらを含むグループであり、ロマンティックで流血の力ではなく、労働者間の連帯の発展、相互扶助や、経営者との日常闘争による準備を通じた革命を追求し、これに対して、V. グリフェールらのアルマニストとアナーキストの同盟の支持者たちは直接的行動、暴力、とりわけゼネストによる革命を目指すとする。そして、前者は後者を冒険主義、後者は前者を改良主義と非難し合ったと。その上で、E. ドレアン、G. ルフラン、J. ジュイヤール、J. メトロンらの歴史家は、前者を *réformistes*、後者を *révolutionnaires* と呼ぶが、この用語法は、前者がだまし、嘘をつくのに対して、後者が真面目であったとすることにつながり、一方の陣営、革命主義的潮流

2) Dominique ANDOLFATTO, Dominique LABBE, *Histoire des syndicats (1906-2010)*. 2011. 初版は2006年。

を支持し、他の陣営、「改良主義的」潮流を正しく評価することを妨げた
と結論する³⁾。

J. ジュイヤールはこれに応えるかのように、『19世紀』誌において、19
世紀末から20世紀前半の改良的社会主義についての特集を組み、改良主義
réformisme の再評価を行っている。そこでは、「歴史研究において、社会
的生成のロマンティックな革命的ヴィジョンが支配的である限り、改良主
義は主要な対象として現れ得なかった」とされ、「20世紀の革命の悲劇的
失敗が改良主義の観念を今日の社会的、政治的思索の軸とする」と言われ
る⁴⁾。さらに、同誌上で、C. プロシャソンは、次のように言う。「1960年代
から1980年代のフランス労働運動の歴史における高揚期に改良主義がはっ
きりとした不評判を被ったことは疑いない」と⁵⁾。改良主義的潮流の評価
が時代に制約されていたことが強調されるのである⁶⁾。

この再評価の動向を確認した上で、これまでの研究における改良主義の
取り扱いを整理しよう。まず、フランスにおける通説的見解として、
D. アンドルファットと D. ラベに名指しされた、E. ドレアン、G. ルフラン
を取り上げる。ドレアンは、『労働運動史 第2巻』の第2部を「サン

3) *op. cit.* pp. 54-56.

4) Le réformisme radical. Socialistes réformistes en Europe. *Mil neuf cent. Revue d'histoire intellectuelle.* 30. 2012. p. 3.

5) C. Prochasson, Nouveaux regards sur le reformisme. Introduction. 例外的
に、1974年に、『*Mouvement social*, 87, avril-juin』においてJ. ジュイヤール編に
よる、特集 Réformisme et réformiste française が組まれたことも指摘される。
op. cit. pp. 6, 7.

6) 労働組合運動に関してではないが、M. ペローは、I. モレ・レスピネの著
作への序において、これまで、労働局が十分に研究されてこなかったこと
に関して、「このような回避反応は、長く改良主義者に対してかけられてきた
疑いの伝承であろうか？」として、同じく改良主義について語ることが避け
られてきたことを指摘する。Isabelle Moret-Lesipinet, *L'Office du Travail
1891-1914. La République et la réforme sociale.* 2007. p. 7.

ディカリスムの英雄時代」, とくに第2章を「ヴィクトール・グリフェールとアミアン憲章」とする。彼によれば, 1905年ブルジュ大会における, 翌年5月1日の8時間労働運動へ向けた全国的ストライキの決定は, クフェルら改良主義者 *réformistes* に抗して獲得されたものであり, その後1906年アミアン大会においても, 組合の自立性に関しては一致が見られたとしても, 社会改良の手段としての組合と, 社会変革の手段としての組合という二つの概念がぶつかったとする。両潮流の対立が強調される。ただし, ドレアンは, 1896年トゥール大会の大会報告において, CGT の設立は, 書籍労連と全国鉄道労組によるものであると認められたことを紹介している。これからすると, 改良主義的潮流を全面的に無視し, 否定していたとは言えない。しかし, 第一次世界大戦前にはそれを傍流とみなし, 主要な流れを革命的潮流に見, 積極的に評価していたことは確認されねばならない⁷⁾。

G. ルフランは様々な潮流の存在を強調する。CGT 設立前年の全国労働組合連盟ナント大会に関して, 労働者世界に熱狂的に受け入れられたゼネストの観念は, 労働組合を政党の支配に置こうとし, ゼネストを「欺瞞的」としたゲード派に抗したアナーキスト (F. ベルチエラ), アルマニスト, ブランキスト (V. グリフェール) およびいくらかの改良主義者さえ含んだところの統一を実現したと言う。その上で, 1914年までのフランス労働組合運動においてはアナーキストの影響力が大きかったが圧倒的とは言えず, 主な潮流としてゲード派, A. クフェルを代表とする改良主義派, 革命的サンディカリストを数える⁸⁾。

7) Cf. Edouard DOREANS, *Histoire du Mouvement Ouvrier II* 1871-1936. 1948. pp. 122, 138, 44, 44-45.

8) ジョルジュ・ルフラン『フランス労働組合運動史』谷川稔訳 1974年。32ページ参照。

我が国で1970年代に展開された議論は、少しく様相を異にする。その代表例として喜安朗を取り上げよう。喜安は、さきに見たフランスにおける認識を受け継ぎながら、さらに一步進んだ考察を加える。すなわち、1890年代の創設期におけるCGTにおいて、印刷・出版労連、全国鉄道労組が主導的役割を果たしたことを確認した上で、これらの組織は、イギリス型の職能別連合体の形成・発展によって運動の展開をはかろうとしていたとする。そして、運動のこの方向は、フランスの産業構造に規定された労働組合の構造に適合的ではなく、革命的サンディカリストがCGTの主導権を握ることによって、20世紀初頭のフランス労働組合運動の急展開につながるかと考えるのである。しかしながら、喜安によると、皮肉なことに、運動の発展は、労働組合の大衆化、大規模化、組織の中央集権化と組合官僚の発生、組合内部での支配的意識の変化と改良主義の進展となるのである⁹⁾。つまり、ドレアンやルフランにあっては、必ずしも鮮明になっていなかった革命的サンディカリズムと改良主義的潮流の対抗関係が、フランスの産業構造、それに照応する組合運動のあり方と結び付けられ、抜き差しのない敵対的關係として把握される。革命的サンディカリズムが現実的展望を欠いていたとはいえ、逆に現実に拝跪しようとする改良主義に抗して、「革命のロマン」、ゼネスト願望を通じて労働運動を飛躍的に広げたことへの称賛、さらには、1970年代における社会変革の夢への共感があつたことは言うまでもない。

谷川稔は、フランスに特有な現象としての革命的サンディカリズムに強い共感を持ち、その歴史的意味、起源を探る点で喜安と問題関心を共有する。しかし、谷川は、反ゲーディスム諸潮流のミリタンがゼネストを共通目標として運動を形成した過程ととらえる喜安の見解は、思想史的分析が

9) 喜安朗『革命的サンディカリズム パリ・コミューン以後の考動的少数派』1972年。227, 212ページ参照。

欠如していると批判する。その上で、従来の研究で思想が問題にされる場合 F. パルチエのゼネスト論に集中され過ぎているとし、それと並んで、それ以上にアルマニストの役割が大きく、その解明が必要であるとする。そのような立場からすれば当然ではあるが、改良主義的潮流への関心は弱い。CGT 外の黄色組合を「階級協調と改良主義に徹した集団」とすることからは、CGT 内の改良主義に対しても厳しい評価をしていたことがうかがわれる^{10), 11), 12)}。

ここで、あらためて冒頭に指摘した、D. アンドルファット、D. ラベと J. ジュイヤールによる、革命的サンディカリズム、改良主義的潮流についての再評価の詳細を検討しよう。具体的には、アミアン大会をめぐる諸潮

-
- 10) 谷川稔『フランス社会運動史アソシアシオンとサンディカリズム』1983年。175-176、201ページ参照。
- 11) 我々は、別な意味でアルマニスト、J. アルマヌに強い関心を持ち、その点で谷川の研究から大きな示唆を得ている。しかし、J. アルマヌその人が印刷工組合の創設者であることには言及されても、後に、書籍労連において改良主義の指導者 A. クフェルとその主導権を争い、敗れたことには全く関心ははらわれていない。革命的サンディカリズムに主要な関心があり、その思想こそが問題であるということからすれば自然な成り行きであるとはいえ、この重要な事実を見ないとすると、議論の足元が危うくなると言わざるをえない。
- 12) それ以降、我が国においてフランス労働組合運動への関心は著しく低下した。最近の研究として、以下のものを指摘しておく。大森弘喜「19世紀フランスにおける労使の団体形成と労使関係」『経済系』2006年。基本的には喜安、谷川の見解を継承している。出版印刷労連は、イギリス合同機械工組合にも匹敵する熟練工中心の組合であり、CGT 創設期を支えたのではあるが、19世紀末においては例外的存在であり、革命的サンディカリズムの思想とは遠いとする。高井哲彦「フランス労使関係における多元構造の起源—スト破り組合の誕生と衰退、1897-1929年—」『経済学研究』2003年。高井は、スト破り組合、フランス黄色連盟の前身に、従業員組合と並んで出版労働者連盟をあげている。これは、谷川の改良主義についての評価を継承したものである。

流の叙述にそれは示される。D. アンドルファットと D. ラベの議論の特徴は、まず、革命的サンディカリズムを体現する V. グリフェールについての評価にある。グリフェールが、フランスの労働組合運動は、社会民主主義も、トレードユニオン主義も排すべきであり、議会や政府との関係を拒絶し、直接行動を第一義とすべきであるとしたとする点では、通説に従っている。ただし、「グリフェールはしばしば慎重さを示した」として、「1906年のメーデーの準備の際に、1895年から設置されていたゼネラルストライキ委員会を中断し、また、大会が CGT の崇高な目的としてゼネラルストライキの原理を打ち立てた時には、実践的には組織の目標からそれを取り除いた」とすること、さらには、アナーキストの G. イヴトが反軍国主義、反愛国主義を強調したのに対して、公式にはこの言葉を使わず、イヴトとは「反軍国主義、反愛国主義に対する態度が異なった」とすることからは、従来の評価とのニュアンスの違いを見て取ることができる¹³⁾。

次に注目すべきは、アナーキストに関する叙述である。その代表的人物であり、1902年からグリフェールらとともに CGT の事務局を構成し、ナンバー 2 となった G. イヴトについて、極めて評判が悪く、彼の派遣をどの組合も喜ばなかったと手厳しく評価する。さらに、「その人格や挑発的行為が総同盟にとって迷惑であったにもかかわらず、いかにして12年間も (CGT の) 事務局にとどまり続けたのか？ 労働取引所を支配することによってであり、各労働取引所が一票を持ったが、参加費もなくイヴトに委任したからである」とする。また、1906年の炭鉱夫大ストライキに介入して、組合を分裂させ少数派の指導者となった B. ブルチュウが、様々な暴力事件、とくにランス市役所襲撃を引き起こし、クレマンソーによる軍隊派遣に口実を与えた¹⁴⁾。二人についての評価は、通説と共通する点もあ

13) Cf. D. ANDOLFATTO, D. LABBE, *Histoire des syndicats. op. cit.* pp. 23, 30.

14) Cf. *op. cit.* pp. 29, 31, 27, 28.

るが、これらの事実が、当時の CGT 運営のずさんさの証拠として取り上げられ、強調される点は見落とせない。

他方、少数派で改良主義の代表であるクフェルに関しては、「引退する 1920 年まですべての（CGT の）大会に参加し、その説明の明瞭さ、論理の厳格さ、寛容と礼儀正しきで議論を支配した。しかも、1909 年までグリフェールによる攻撃の的であったことからこれも称賛に値する」と高い評価を与える。そして、彼が 35 年間にわたって指導し続けた書籍労連は、部門の大部分の労働者を組織し、最低賃金を確立し、集団契約を結び、多くの相互扶助サービスを提供して、フランスの労働組合がありえた別の道象徴しているにもかかわらず、この書籍労連は、相互扶助主義、改良主義、階級協調主義と非難されたと言う¹⁵⁾。

J. ジュイヤールは、両潮流の妥協で採択されることになるアミアン憲章が、直接的要求、部分的改良を少なくとも公式には拒否しないことを指摘する。さらに、「一般に歴史家は、CGT の歴史において、アミアン大会が提示するプラグマティックな転換を十分には強調しない」とし、グリフェールに、「ゼネラルストライキが組合綱領の代わりになっていた無秩序な情熱が支配する前の時代」からの転換を見るのである。ジュイヤールは、アミアン大会における多数派が、一組合一票制度によって若干作為的なものであったことにも注意を促す¹⁶⁾。クフェルに関しては、「改良主義の尊敬される老賢者」「明晰さと知識を持つ」などとし、対立する陣営の主張についても、彼の要約が正確であるとして引用する¹⁷⁾。

15) Cf. *op. cit.* pp. 32, 33.

16) Cf. J. JULLIARD, *La charte D'Amiens, cent ans apres. Texte, contexte, entrepretations. Le syndicalisme révolutionnaire. La Charte d'Amiens a cent ans. Mil neuf cent.* 24. 2006. pp. 10, 11, 12.

17) Cf. *op. cit.* pp. 12, 13, 10.

D. アンドルファット, D. ラベと J. ジュイヤールはニュアンスの違いはあれ、ともに、革命的組合主義の無条件の賛美に近かったこれまでの議論に対して、アミアン憲章が日常的改良の闘争を肯定する点を強調し、また、グリフェールのゼネラルストライキへの慎重な態度を指摘して革命主義的潮流の比重を相対化し、傍流とされてきた改良主義に正当な位置を与えようとする。その際、改良主義の中心となった書籍連合の指導者、A. クフェルに高い評価が与えられる。

以上の研究史から我々の課題を整理しよう。第一に、改良主義とは何か、革命主義との対立点はどこにあり、その対立はどの程度かである。ドレアン、ルフラン、喜安、谷川は社会改良と社会変革を真っ向から対立するものにとらえており、これが通説であるとしてよい。しかし、D. アンドルファット, D. ラベは、革命的目的、プロレタリアートの解放の目標で両者が共通していたとした。これとかかわって、旧世代に属する H. デュビエフの、次の指摘が注目される。すなわち、「クフェルを代表とする当時のポジティヴィストは暴力を否定するので温和派に区分されるが、イデオロギー上では改良主義より革命的サンディカリストに近く、彼らの温和主義は労働者主義と結びついている」¹⁸⁾と。したがって、フランスにおける労働組合運動生成期における改良主義は、まず、それ自体として、独立させて考察されるべきである。その上で、喜安やジュイヤールが言うように、アミアン大会以降、革命的労働組合主義そのものが現実主義的に改良主義に傾斜してゆくとすると、この改良主義とクフェルのそれは同一視できるのかが問われる。

第二に、この時期の改良主義といっても、機械工クーバ、鉄道労組ゲラール、さらにはゲード派の炭鉱労組、繊維組合のそれはニュアンスを異に

18) H. デュビエフ『サンディカリズムの思想像』谷川稔訳 1978年。38-39ページ参照。

し、それぞれに別個の考察の対象となりうる¹⁹⁾。とはいえ、書籍労連の中心的役割は否定しえず、我々の検討は、そこに焦点を当てる。その場合、狭いサークルに止まったポジティヴィズムを信奉するクフェルが上に見たような大きな影響力を持ちえた事情の考察抜きに、書籍労連の改良主義について語ることはできない。書籍労連の歴史については、M. レバリュエやR. ドンベル、P. ショベらの労作があり、これらを踏まえ、クフェルの全体像を解明する²⁰⁾。

第2節 A. クフェルの人物像——後世の評価

A. クフェルの活動分野は、これまで見てきた、書籍労連やCGT以外にも、1891年設立の労働高等審議会、晩年の、第一次世界大戦に際しての神聖連合など幅広い。国際書籍連盟での役割とともに、当時、アメリカ合衆国労働組合運動の中心であったAFLの設立者で長く議長を務めたS. ゴンパースとの深い交流も見落とせない。これらの活動は全て、彼の改良主義の一部をなしている。フランスにおいてもまとめられてこなかった、これらを総合したクフェルの全体像を明らかにすることが我々の課題である。

19) D. アンドルフアットとD. ラベは、いま一人の少数派代表であるP. クーバと彼が指導する機械工労連に関して、次のような興味深い指摘をする。「クフェルが可能な将来を象徴していたのに対して、クーバは、産業の進展に見放されたシステムを体現しており、不熟練工に門戸を閉ざしたメチエの連合である」と。しかし、書籍労連の中核をなす植字工組合においても、組合員資格は徒弟にも開かれるとはいえ資格を持つ労働者＝熟練工である。喜安や大森は熟練工と改良主義の関連を強調する。この点の検討は別の機会に譲りたい。CF. D. ANDOLFATTO, D. LABBE, *Histoire des syndicats. op. cit.* p. 35.

20) Madeleine REBERIOUX, *Les ouvriers du livre et leur fédération. Un centenaire 1881–1981*, 1981. p. 106. Roger Dombret, *La Fédération française des travailleurs du livre, 1881–1966. Quatre-vingt-cinq ans de vie et de luttes*, 1966. P. CHAUVET, *Les ouvriers du Livre et du Journal*. 1971.

本節では、その前提として、これまでのA.クフェル像の代表的なものを取り上げて検討する。

出発点として、後世の定まった評価の代表である、J.メトロン編『フランス労働運動活動家辞典』1975年をレバリュール、シヨベで補いながら考察し、次節において、同時代の友人V.ブルトンによる人物評（1892年）、もっともよく引用される、革命的労働組合主義の傾向に属するジャーナリストM.アルメル的人物評（1910年）を検討する²¹⁾。

最初に、年表（表1）を掲げ、クフェルの略歴を確認しておこう。

M.レバリュールは、「A.クフェルの人物像が書籍労連の中で伝説化している」と、見落とせない指摘をする²²⁾。以下で検討しようとする人物評に

21) Jean Maitron, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*, 1975. pp. 143-145. V. BRETON, Les typographe contemporains. Auguste KEUFER Membre du conseil supérieur du travail. Délégué de la Fédération française des taravailleurs du livre. *Les Archives de l'imprimerie*. pp. 179-180. A. N. Fonds Emile Corra (Societe positiviste internationale) 17as/5 Dossier4.A. Keufer. Mauris HARMEL, AUGUSTE KEUFER. *Les Hommes du Jour*. 27 Août 1910. No. 136. 他に、同時代のものとしてJ.-F.ブワによる、CGTの二つの傾向の代表としてグリフェールと並べた紹介 Joseph-Francois BOIS, À la C.G.T. Deux Hommes-Deux Thèses. *La Correspondant* 25 juillet 1910. pp. 242-263. クフェルの葬儀に際しての書籍労連後任書記リオションの挨拶 La Mort de Keufer. *L'Imprimerie Francaise*. No. 91. 16 avril 1924. p. 2. が重要であり、適宜参照する。クフェルの書籍労連、労働高等審議会での活動、およびプロレタリア・ポジティヴィスムに関しては、F.ビルク、I.モレ・レスピネの優れた研究があるが、それについては、クフェルとプロレタリア・ポジティヴィスムを検討する次稿で参照する。Cf. Françoise Birck, *Le Livre Nanceien des origines à 1914*. 1983. Le Positivisme ouvrier et la quetion du travail. *Histoire de l'Office du Travail*. dir. J. Lucciani. 1992. Isabelle Moret-Lesipinet, *L'Office du Travail*. op. cit.

22) 「オギュスト・クフェルの人物像が書籍労連の中で伝説化しているとするなら、それは、彼の生涯の全てが組合活動をめぐって組織されているからである」。M. REBERIOUX, *Les ouvriers du livre*, op. cit. p. 106.

表1 クフェル略歴

1851年	オ・ラン県 サント・マリー・オ・ミヌで誕生
1865年	サント・マリー・オ・ミヌの印刷所で徒弟修業
1871年	アルザスのドイツ併合に際してアルザスを離れる ロン・ル・ソルニエで年末まで働き、パリへ
1872年	母親をパリに呼び寄せる
1872年	パリ植字工組合加入
1880年	プロレタリア・ポジティヴィスト・サークル代表
1881年	フランス書籍労連設立 中央委員
1883年	ボストン博覧会にパリ植字工代表として参加
1884年	書籍労連中央委員会書記長
1891年	労働高等審議会委員
1895年	CGT 設立 会計責任者
1900年	労働高等審議会副議長
1906年	CGT アミアン大会 V.グリフュールとの協調による アミアン憲章
1909年	グリフュール解任 ニエルを CGT 書記に支持
1914年	第一次世界大戦宣戦とともに神聖連合に加入
1920年	書籍労連書記長を辞任
1924年	死去

おいても、評者それぞれの立場から生まれるバイアスには十分注意せねばならない。同時に、生み出された伝説もまたクフェルの人物像再構成には重要な手掛かりとなる。この点に留意して、J.メトロン編『フランス労働運動活動家辞典』中の KEUFER Auguste²³⁾の検討から始めよう。略歴に

23) Jean Maitron, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*, *op. cit.* pp. 143-145. クフェルについての叙述は第13巻, 1975年, 143ページ右欄から145ページ左欄に及ぶ, ほぼ2ページ分である。ちなみに, J. アルマヌは第10巻, 1973年, 130ページから134ページにかけて, ほぼ4ページ分, V. グリフュールは第12巻, 1974年, 331ページから334ページにかけてほぼ3ページ分である。したがってクフェルについての叙述の量は少なくはない

次ぐ、冒頭要約は以下のとおりである。「書籍の最も偉大な活動家。CGTの最重要人物の一人。第三共和政期の労働運動の大物の一人。その点で反対の傾向の中心人物であるグリフェール、メレイムと比肩しうる影響力を持つ」。メトロンが改良主義的潮流を正しく評価してこなかったとは言えないほど、クフェルは大きく評価されている。以下、書籍労連での活動、CGTでの活動、出自とポジティヴィスムについての叙述の順に考察する。

書籍労連での活動については以下のとおり。1872年労働組合に加入し、1878年ストライキ後に積極的ミリタンとなったクフェルは、1881年には、書籍労連設立に参加し、中央委員に選出される。J. アルマヌに対抗して改良主義を主張し、1884年から書記長となるが、革命的なパリの組合とうまくゆかず、1886年に分裂が起こる、と。この事実経過は、クフェルが改良主義を主張し、指導権を掌握した過程が、決して自然な、平坦な道ではなかったことを示唆する。谷川は、アルマヌストこそが革命的サンディカリズムの思想的中心であったことを強調した。そのことの当否はともかく、J. アルマヌは、コンミュン戦士であり、書籍労連内外に影響力を誇り、その信奉者たちアルマヌストが当時の革命主義的労働組合運動において大きな役割を果たしていたことは否定されえない。また、パリ支部こそは書籍労連の中心であり、そこでも革命的労働組合主義が有力であった。このアルマヌと、パリ支部の革命主義に抗して改良主義を掲げ、指導権を握ったクフェルの理論家、組織者としての力量が確認されるべきである。

指導権を掌握した後、「クフェルの組合主義は、暴力と衝動に反対して、イギリスの労働者主義、あるいはドイツの社会主義的組合主義の方向を進む」とされるように、改良主義の路線が定着されてゆく。同時に、「書籍

が、相対的にはJ. メトロンがクフェルを評価していることになる。なお、この辞典は多くの著者によって執筆されており、H. デュビエフ、M. レベリユーは編集員に加わっている。

労連の大会は5年ごととなり、極めて集権化される」ことが強調される。集権制と改良主義、革命主義との関係は必ずしも自明ではないが、当時において、両潮流の対立点の一つを構成していたのである²⁴⁾。

書籍労連におけるクフェルについての総括的な叙述は次のとおり。すなわち、「書籍労連は、文字通りクフェルの作品である。彼の敵は、専制的気質、改良主義、退廃と呼ぶ手法を非難するが、人格的まじめさと、並はずれた組織者のセンスを認める」と²⁵⁾。ここでも革命主義者からは「専制的気質」が非難されており、専制が対立点であることが示される。他方、敵対者からも組織者として評価されたことには、組織者クフェル像が鮮やかである。同時に、二つの潮流の対立が決定的なものではなかったことも示唆される。

CGTにかかわる活動についての叙述を表2に整理する。ここからは、組合運動に限定されてではあるが政治家クフェルの姿が浮かび上がる。1組合1票制でからも多数派を形成する革命主義を、組合員数に基づく投票の主張で牽制し続け、一方で、アナーキストを激しく攻撃しながら、他方で、ゲード派を排除するためにはグリフェールを支持して、「アミアン憲章」の採択に大きな貢献をするという、原則は堅持しながらも妥協を辞さない駆け引きが見て取れる²⁶⁾。また、1909年大会において、グリフェール解任に役割を果たしたことで、短期間のニエルを経て書記長となったジュオーに関わって、「グリフェールには共感しなかったがジュオーとは意見が一致し」、「ジュオーの敵たちからは、クフェルがジュオーのためにベン

24) 後のレーニンの革命主義は集権制と結びつき、革命主義の内部で集権制か分権制かが争われることは周知のとおりである。

25) 「初期は、ほとんど一人で La Typographie française を編集した」と言われる。

26) アナーキズムとゲード主義に厳しく対峙することは、クフェルの改良主義を解明する上で重要な手掛かりである。

表2 CGTにおけるクフェルの活動

1895年 CGT 設立大会	ゲラールらとともに設立者 それ以降、全てのCGT大会に出席
1904年ブルジュ大会	組合員数比例投票権動議提出、否決 5月1日の示威運動に関して直接行動を非難 アナーキズム批判 プージュエ、ヴィルヴァルと激しい口論
1906年アミアン大会	独自の組合独立性動議の提出 グリフェールの、いわゆるアミアン憲章の動議に合流 イヴトの反愛国主義批判
1909年大会	ニエルを全面的に支持
1914年	開戦とともに神聖連合に加入 ²⁷⁾ クフェルはそれ以来、CGTの新しい多数派

で奉仕している」と言われたと指摘される。ここにも、組合政治家クフェルの姿が示される。「反愛国主義」を徹底して批判し、第一次世界大戦に際して愛国主義の先頭に立った一貫性も見落とせない。

出自とポジティヴィスムに関する記述は以下に要約できる。すなわち、1851年オ・ラン県サント・マリー・オ・ミンヌに生まれ、貧しい少年時代を過ごす。植字工徒弟修業の後、アルザスのドイツ併合に際して、フランスを選択して、ロン・ル・ソニエの印刷所で働く。この時、A. コントの弟子であったラフィットの講義を受け、ポジティヴィストとなる。「ポジティヴィスムは彼の生涯を導き、アルザス人気質とともに彼の組合道徳主義を説明するものとなる」。1871年末にパリに移り、プロレタリア・ポジティヴィスト・サークルに参加し、1880年にはI. フィナンスの後を継いで代表となる。1881年、政府内のポジティヴィストの影響のもとで、I. フ

27) クフェルは、彼が敗北主義と非難した人たちから、アルザス愛国主義者と扱われた。

ィナンスとともに労働高等審議会員。1899年のミルラン、1906年のヴィヴィアニの試みを認めるが、クフェルは彼らに追隨はせず、と。

まず、「貧しい少年時代」、「植字工徒弟修業」というクフェルの生涯を規定し、その思想を決定づけることになる要因が確認されるべきである。ついで、ポジティヴィストであったこと、それが彼の生涯、組合活動を導くとともに、労働局やミルラン、ヴィヴィアニなどの政治家との結びつきをもたらしたとの指摘が注目される。プロレタリア・ポジティヴィズムがいかなるものであり、クフェルの改良主義がそれとどこまでかかわっていたのか、彼の組合活動にいかなる影響を与えたのかは、今後、検討すべき課題である。

1924年死去。享年73歳。共和国大統領ミルランのお悔みがあったこと、葬儀は書籍労連葬とされ、書籍労連常任書記リオション、パリ植字工組合書記ラルジャンチエ、CGT 副議長のミリオンの弔辞が指摘される。また、死去時のクフェルの肩書について表3に整理した記述が与えられる。ここでも、クフェルとポジティヴィズムの強い結びつき、労働・教育行政との深いかわりが示唆される。

メトロン辞典の編集にもかかわっていた M. レベリユーの『書籍労働者とその連盟』と、P. ショベ『書籍・新聞労働者』から、上のクフェル評価を補足する²⁸⁾。

レベリユーによる組織者としてのクフェル評価は以下のとおりである。すなわち、「クフェルのすべての生涯が組合活動をめぐって組織され」て

28) Madeleine REBERIOUX, *Les ouvriers du livre et leur federation. op. cit.* 書籍労連の100年を記念して、書籍労連の全面的協力のもとで出版された。出版事情とともに、レベリユー自身が当時の左翼的運動に積極的にかかわっていたことには留意されねばならないが、先行する R. ドンブレの85年誌とともに、書籍労連、A. クフェルについて論ずる際には検討が欠かせない文献である。P. CHAUVET, *Les ouvriers du Livre et du Journal. op. cit.*

表3 死亡時におけるクフェルの肩書

国際ポジティヴィスト協会副会長
ポジティヴィスト民衆教育協会副会長
プロレタリア・ポジティヴィスト・サークル代表
全国労働審議会員
技芸・製造諮問委員会
技術教育高等審議会員
諸国民協会フランス協会副会長

おり、「彼の生涯を語ることは書籍労連のそれを語ることであり」とした上で、「素晴らしい管理者として、きわめて多くの手紙を支部と交わし、そこでは、深い道徳性が戦術家の巧みと結びついていた。彼は、決してパリの議長席から労連を管理したのではないことは、彼が行った多くの地方派遣が物語るところである」と。メトロン辞典との相違点は、「専制的気質」との否定的用語にかわって、「深い道徳性」が指摘されることである²⁹⁾。また、「専制」にかかわって、別の場所では、「書籍労連はブルドン主義に支配されなかったのでその集権制を批判された」としながら、この書籍労連中央委員会の集権制については、植字工中心、パリ支部中心などの要因も指摘し、立ち入った考察を加えている。専制の問題をクフェルだけに還元していないのである³⁰⁾。

レバリュエの関心は書籍労働者のあり方とクフェルの個性、改良主義との関係に向けられていた。ポジティヴィズムにかかわる記述において、それは一層明らかになる。次のように言われる。「若い時から教育を受け、反集産主義、反協同組合主義者として忠実であり続けたポジティヴィズムの宗教は、彼の眼には書籍に深く根を下ろした実践である」と。さらに

29) M. REBERIOUX, *Les ouvriers du livre*, *op. cit.* p. 106. 以下、引用は、断りがない場合、同ページコラムからのもの。

30) *Op. cit.* pp. 100-108.

は、「ポジティヴィスト、しかし労働者。彼が1880年から指導したのはプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルである」と。つまり、ポジティヴィストであることと、植字工としての労働、書籍労連での活動の調和が指摘される。結論として、「オギュスト・クフェル、強い確信を持った活動家と、変化がまだ小さく、伝統が根強く残る労働者階級が出会ったのである」と。メトロン辞典は、ポジティヴィストであるクフェルが全生涯をかけて書籍労連を改良主義の方向に導いたことを強調していた。これに対して、レベリユーは、むしろ書籍労働者世界の伝統がクフェルのポジティヴィズムと合致したととらえるのである。

続いて、レベリユーは、「クフェルは国家権力を軽視もせず、無関心でもなかった」、「最も恵まれない人々の利益に奉仕する法律を信頼した」、しかしながら、「労働者にとっての「自分のために、自分のことをなす」権利を要求した」として、クフェルの考え方の根底に自助努力があったことを指摘する。「彼はまた、社会を変えるための、教育への絶対的信頼を表明し、したがって、彼が政治的と呼ぶ闘争、あるいは変化——彼の眼には短期間の泡——への無関心、さらには敵意を表明した」との叙述もまた、その延長上にある。労働者の自助努力による成長と、それによって社会における地位を向上させようとするこれらの主張は、ポジティヴィズムの影響によるものである。当時の労働者世界、ミリタンの心性、革命主義と改良主義の理解にとって、この自助努力、教育は重要な手掛かりを提供する。最後に、これらのクフェルの強い信念は、彼の出自に結び付けても理解された。「クフェルの出自と勤勉な過去が、困難な時期に彼を助けた」と³¹⁾。

P. ショベは、後に見る H. アルメルに依拠して、クフェルの組合官僚的

31) レベリユーは、クフェルを好意的に見ている。「クフェルは、模範的な夫であり、大家族の父であり、よき連れ合い、ダンス上手でも有名」と。

な、さらには「黒幕的な」政治家の一面を強調する³²⁾。ミルランやヴィヴィアニアらの政治家との付き合い、労働高等審議会副議長の肩書による労働者の就職斡旋などである。革命的組合主義と改良主義的組合主義との対立点の一つとして、この政治とのかかわりがあったことを確認しておこう。

他方で、ショベは、クフェルの敵対する人々からも支持された真面目さ、組合への専心も強調する。「1924年にクフェル夫人に年金を与えることが中央委員会で提案された際に、最も激しい敵対者の一人であったイヴトは、この決議に真っ先に賛成した」と。さらに、「彼の生存中から、彼の敵対者が彼に少しは長所を認めていたことは本当である」と^{33),34)}。当時の両潮流の対立の程度を考える上で、貴重な手掛かりである。

第3節 A. クフェルの人物像——同時代の評価

前節で検討した後世におけるクフェル評価から出てくる論点は、出自とポジティヴィズム、改良主義の諸要素、革命的組合主義との対立点、対立の程度であった。同時代の、同じく植字工である友人ブルトンによる紹介文と、当時の労働組合運動において対立する立場にあったアルメルによる人物評を検討して、これらの点を深める。

まず、「オギュスト・クフェル 労働高等審議会メンバー、書籍労働者フランス連合代表」との表題を持つブルトンによる紹介文³⁵⁾。これは表題

32) P. CHAUVET, *Les ouvriers du Livre. op. cit.* pp. 59, 61-62.

33) *Op. cit.* pp. 59-60. 「すでに、1919年の大会で、クフェルに退職金を支払うことが問題になった際に、やはり、いつも敵対していたヴィルヴェルは同じような事を言っている」、「もちろん、このミリタンの真面目さを疑うことはできない。いくつかの局面ではおそらく小心であるが、その生活は全てまず第1に植字の事柄に捧げられた」とも。 *ibid.*

34) 労働高等審議会において、「経営者の代表とかかわりを持ち、発言の明晰さと客観性によって認めさせた」と、ショベによっても、これまで見てきた評価が確認される。 *ibid.*

からも推測されるように、1891年設置に伴うクフェルの労働高等審議会会員就任とかかわっている。さらに、アルメルに「若い時のことについて多くを語らない」と言わせた、クフェルの出自や青年時代についての珍しい記述を含んでいる。内容からすれば、アルザスを出た20歳のクフェルが1年近く寄宿していた際にブルトンに語ったことが基になっている³⁶⁾。

「クフェルは、この私的な事実を打ち明けることを恐らく望まないであろうが、私は、いまあげたことを沈黙のままにしておくにはあまりにも尊敬すべきものである」との前置きを確認した上で、出自に関する叙述から見よう。「彼の出生はつらいものであり、少年時代は長い耐久生活を強いられ、ほとんどミゼールであった。小さいころから自然な支えである父親がなく、彼は母親的献身のモデルのような勇敢な母親のおかげで、極めて貧しいが秩序と労働の習慣の中で成長した。……十分とは言えない粗食であり、粗末な服装ではあったが、それは端切れでちゃんと繕われていた。学齢期になると母親はあらゆる犠牲を払って、クフェルを学校にやり、少しではあるが教育を受けさせた。……このような条件で、クフェルの性格が鍛えられたことが分かる。いつも献身と誠実の手本があり、彼はまじめで献身的な人間になる以外なかった」。

35) V. BRETON, Les typographe contemporains. *Les Archives de l'imprimerie. op. cit.* pp. 179-180. *Les Archives de l'imprimerie.* は、ジュネーブで発行されていた印刷技術雑誌。ブルトンは、ここに「パリ通信」を定期的に掲載。また、ブルトンは、後に書籍労連中央委員にも選出され、印刷技術学校の教員にもなっている。機関紙 *Typographie française* に、とくに植字技術、職業教育関連の記事を多く執筆している。

36) この間の事情については次のように言われる。アルザスを出てロン・ル・ソリネで働いていた際に「私は共通の友人の紹介でクフェルを知った。この友人が私に勇敢な少年の生活を教えてくれたのである」と。また、「こうして1871年12月にパリへ去るまでクフェルは家族の一員であった。1年近くクフェルと同じ家族生活を分け合って私は彼を評価することができた」と。

メトロン辞典では、「貧しい少年時代」との表現が使われていた。後に見るアルメルはクフェルの若い頃について「知られていることの全ては、若い時が貧しく、骨の折れる、つらい時期であったことである」とする³⁷⁾。ブルトンもまた、「貧しさ」、「貧困」を強調するが、その内容を理解する上で、次の指摘は重要である。すなわち、「このようにつらい状況で、どれほどの人が子供を工場へやることでその状況を少しでも改善しようとしたことか。当時は8歳労働システム——この工業の野蛮——が支配していた」と。したがって、クフェルは教育も受けずに工場へやられるような環境にいたこと、しかし、ともかくも初等教育を受け、13歳で徒弟修業に入ったことがわかる。この徒弟修業こそが、クフェルを「熟練工」=植字工にしたのである。当時の労働組合運動において中核をなしていた「熟練工」の多くがこのような「貧困」層から供給されていた³⁸⁾。それはまた、教育程度の低さともつながっていた³⁹⁾。しかし、同時に、ブルトンが指摘するように、さらに、より一層「貧しい」工場労働者が存在したこ

37) M. HARMEL, AUGUSTE KEUFER. *Les Hommes du Jour. op. cit.*

38) メトロン辞典によると、書籍労連で争うJ. アルマヌも、ピレネーの下層民の出である。また、I. レスピネ・モレは、同じポジティヴィストで労働局に入るF. ファニョが、小農業経営者の息子であり、父親の死で中等教育をあきらめ植字工の徒弟となったとする。断片的ではあるが、クフェルの周辺のこれらの事例も、これを支持する。CF. Jean Maitron, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français, op. cit. Tome. 10.* p. 130., Isabelle Lespinet-Moret, *L'Office du travail 1891-1914. op. cit.* p. 125.

39) この点について、D. アンドルファットとD. ラベは、重要な指摘をしている。すなわち、アナーキストの中心人物の一人であったP. モナットは学位(バカロレア)があり、知識人であったことからCGT多数派の反知識人主義、労働者主義に苦しんだと。CF. D. ANDOLFATTO, D. LABBE, *Histoire des syndicats. op. cit.* p. 26. モナットは組合指導者の多くが無知であるとし、機関紙『人民の声』*La Voix du peuple*の質の低さを嘆いて、『労働者の生活』*La Vie ouvriere*を創刊した。

とも見落としてはならない。いわゆる熟練工と不熟練工との狭い、しかし明瞭な一線がここに示されている。

いま一つ興味深い叙述は、徒弟修業とその後のあり方についてのものがある。すなわち、「1865年に彼は、サント・マリー・オ・ミヌの1印刷所で徒弟修業に入った、そこで彼は植字、印刷、製本など全ての初歩を身につけねばならなかった。積極的で、勤勉で、彼は短期間のうちにパトロンに大きなサービスをするようになった。しかし、20歳までできるだけ安い賃金で働かされ、搾取された」と。当時、印刷業では3年間の徒弟修業とその後の2年間の少年工雇用が一般的であった⁴⁰⁾。13歳で徒弟修業に入ったクフェルは、この5年間の後なお2年間を雇用主のもとで働き続けたのである。「低賃金」、「搾取」という言葉がクフェルから出たのか、ブルトンのものかは不明である。しかし、そこには、同じ植字工が共有した感覚があったとしてよい。後に、クフェルは、経営主との話し合い、和解を重視したことから、協調主義者として批判されるのではあるが、彼自身の少年期から青年期にかけての体験は、強い響きを持つ「搾取」に表現されるものであり、労働者の状態を改善することへの固い意志が彼の組合活動家、指導者としての根底にあったことを確認しよう。

パリに着いて以降のとくにポジティヴィズムについての叙述。「クフェルは、過ごした全ての作業場で、その勤勉さ、性格の素晴らしさ、生活原理の堅固さで目立った。作業場で模範的な労働者であっただけではなく、その外でも熱心な勉強家であった。1871年に、我々の友人エミール・モルレの指導下でポジティヴィストとなった。ラフィットの講義に熱心に通

40) 拙稿「20世紀初頭フランスにおける「徒弟制度の危機」—労働審議会調査『徒弟制』（1902年）の検討を中心に」『企業研究』第5号 2004年10月 「20世紀初頭フランスにおける従弟制、理念、制度、実態：フランス労働局1899～1903年調査の検討」『商学論纂』第50巻 1・2号。

い、今日彼のものとなるしっかりした哲学的教育を徐々に獲得した。彼が小学校の基礎的な教育を完成させることになったのは、たびたびの徹夜や、たゆみのない、粘り強い勉強を通じてであった」。ブルトンが、クフェルのポジティヴィスムに関して、その中身よりも、まず、初等教育を完成させるものとしてとらえていることに注目しよう。ブルトンによれば、組合活動において、クフェルは、「明白な演説家の能力」、「極めて緻密な論理」を発揮し、また、経営者や知識人と並んだ労働高等審議会における報告書が高い評価を得た。クフェルに関する、後世の多くの言及も、彼の言説における明晰さ、論理性を指摘する。自助努力、労働者の地位向上などの信条が、出自や、その後の経験と親和性を持ったからこそ、ポジティヴィスムを選んだことは認めるべきではあるとしても、このような普遍的な能力を磨いたものとして、ポジティヴィスムがあったことも見落とせない。ブルトンは、その後、組合活動に入ったクフェルが、会計係や監査委員を務めたこと、1883年にボストン博覧会にパリ植字工を代表して参加し、素晴らしいレポートを書いたことも指摘する。これらもまた、教育の成果であり、同時にそれを一層発展させたものであった。D. アンドルファットとD. ラベが指摘するように、当時労働組合運動において、貧困に伴う不十分な教育と結びついて、反知識人主義、無教養主義とも言うべきものが支配的であった。それは、支配的イデオロギー、イデオログへの反発、対抗のあらわれであったとはいえ、労働組合運動にとって大きな弱点になっていた。クフェルのポジティヴィスムの内容の検討は後に譲るとして、彼にとっては、自助努力、勉学を通じた向上を支えるものであった。これは、当時の労働組合運動の対立を考える上で重要な論点である。

ブルトンは、書籍労連指導者クフェルについて、「活力、献身、知恵」、「誠意のある正直さと、厳しい子供時代が彼に課してきた節約の原理のしみ込んだ正直さ」が、「敵の称賛をも引き付け」たとして、これまで見て

きた組織者としての能力を確認している。以下の指摘からは、示唆的なものにとどまるとはいえ、現実の紛争への対処能力を見て取ることができる。すなわち、「しっかりした協調的性格によって、クフェルは経営者と労働者の紛争を避けるために、パリや地方に行くことが問題になった場合、いつも中央委員会の派遣団の一員であった」。「和解が可能な場合には様々な利害の和解を追求し、また、全ての権利が労働者の側にあり、連合の規約を適用しなければならない時には精力的であった」と。クフェルの協調主義は、革命主義者から厳しく批判されたが、日々生じる労使の紛争は、現実的解決を求めるものであった。アルマヌや、パリのセクションとの対抗の中で、クフェルが指導権を掌握し、維持した要因はここにあったのではないかと考えられる。ブルトンの指摘は、この問題の今後の検討にとって不可欠なものと言える。

最後に、労働高等審議会員となったクフェルについての記述は次のとおりである。「確立したこの性格によってクフェルは、政府から、我が国の政治的、経済的名士たちと並んで労働高等審議会に加わることを指名されたのである」。(審議会の構成メンバーを指摘した後)、「クフェルのこの報告が同僚の称賛的となり、新聞も賛辞を寄せた。この機会にクフェルは商工大臣ジュール・ロッシュの紹介でカルノとの親密な会見を得たのである」。「履き古した木靴で、上から下まで継ぎの当たった服で、柴を集めに行っていた時以来、サント・マリ・オ・ミヌの小倅が出世したのが見られる」。友人ブルトンにとって誇らしい「出世」は、成り上がり、労働官僚、労働貴族、黒幕などの批判を呼ぶものでもあった。

同時代のまとまったクフェル評として参照される、ジャーナリスト M. アルメルによる、1910年8月27日付の『時の人』紙を検討しよう⁴¹⁾。前

41) M. アルメルは、L. A. Thomas のペンネーム。郵便局ストで解職されジャーナリストに転じた。1907年から1914年にかけて G. エルベの『社会戦争』

年1909年には、グリフェールがCGT書記長を解任され、ニエル、次いでジュオーに指導権が移り、革命主義は掲げられながら、変質への大きな転換点を迎えていた。アルメルもそれに巻き込まれることになるが、この時点では、革命主義的組合主義の立場からクフェルを批判的に論じている。前文、クフェルの出自から書籍労連の指導権掌握まで、指導権掌握後の中央集権化、政治家クフェル、クフェルの階級協調主義の構成となっている。全体を貫いてポジティヴィスムにかかわる叙述が大きな比重を占めるのが特徴である。アルメルの批判の中心は、書籍労連の中央集権的性格、政府、経営者との協調、それらがポジティヴィスムを信奉するクフェルによって形成され、強化されたことに対してである。前文の以下の叙述がそれを集約的に示している。「書籍労連は、イギリスにおける古いトレイド・ユニオニズムやアメリカの組合のように豊かな資金を持ち、相互扶助のサービスを行い、ドイツの組合のように極端に中央集権化している」。「この組合は、おとなしく、賢く、社会秩序の転覆を望んではない。平等と社会平和を目指し、権力を悩ませようとはしない」。「書籍労連はクフェルの作品であると言われ、それは多くの点で正しい」。「クフェルは、彼が信奉する、労働者世界では珍しい哲学的教義のためにのみそれを実現しようとしたのである」⁴²⁾。

誌に協力。また、1911年CGT機関紙『組合闘争』創刊に加わり、この時以来ジュオーの取り巻きとなる。後に、改良主義の潮流、さらに、第一次世界大戦時には神聖連合に加わるとはいえ、『時の人』紙 *Hommes du jour* に Auguste Keufer を書いた時には、批判的立場にいた。メトロン辞典 L.A. Thomas も、このクフェルに関する人物評によって、ポジティヴィスムの影響と、労使委員会を通じた「社会平和」を告発したとする。第二次世界大戦中のレジスタンスに参加し、捕えられてプシェンバルトの収容所で死亡。

- 42) 次のようにも言われる。「フランスの労働者組織の世界において、書籍連盟は、その組織と精神によって特別な位置を占める」。「それは、この国において、アングロ・サクソン諸国で繁栄している職業的労働組合主義の唯一の

アルメルは、こうした書籍労連の中央集権的性格がクフェルの指導によるものであるとする。その前提となるアルマヌとの指導権争いについて、メトロン辞典よりも詳細な興味深い叙述を与えている。それによると、書籍労連は1881年に設立された後、改良主義と革命主義による中央委員会の支配をめぐる争いを経験する。アルマヌ派社会主義者は1884年に11人中5人を占め、アルマヌは書籍労連を彼の党である革命的社会主義労働者党の支配下に置こうとしていた。アルマヌとクフェルの間で支配権が争われ、クフェルが最終的に勝利し、彼が書記長に選ばれたと。したがって、アルマヌとクフェルの勢力が拮抗しており、書籍労連が改良主義の中心になるのは、この両者の激しい指導権争いの結果であり、決して自然な成り行きではなかったことをあらためて確認できる。この間の経過、クフェル勝利の要因の解明は、今後の重要な検討課題となる。アルメルによると、こうして指導権を掌握したクフェルは、その地位にとどまり続け、中央集権を強化してゆく。そのプロセスは以下のとおりである。「すでに中央委員会の力は大きかった。その代表だけが地方を回り、支部を訪問し、組合員に働きかけることができた。実際、彼らは組織を握った。それでは十分ではなかった。クフェルはドイツをモデルにこの労連を中央集権化しようとした」。

アルメル自身、書籍労連では、もともと中央集権が強かったことを認めるとともに、それが、パリ支部の決定的な比重の大きさとかかわっていたことを指摘している。また、「第21支部だけは、……意志と必要に応じて行動することが可能な金庫を持っていた」とされるパリ支部は、必ずしもクフェルに従うものではなく、指導権掌握後もアルマヌを中心にパリ支部の分裂も生じていた。これらの事実を踏まえると、レベリユーが言うよう

代表である」。「政府は、いつもそのメリットをほめたたえ、「CGTの熱狂者」が示す暴力に対置する」。

に、書籍労連の集権制は、クフェル個人の集権制への志向とは区別して考察されるべきであり、アルマヌの叙述は強引である。しかし、逆にそのことが、当時においては、革命主義と分散性、自然発生性の結び付き、改良主義と集権性の結び付きが自明なものとして捉えられていたことを示唆している。

アルメルはクフェルによる集権化が、組合費の増額、集中によって実現され、その最大の問題は、支部の自発性の抑圧であったとする。以下のとおりである。すなわち、「中央委員会はストライキ資金と路銀の分配者となるために、資金をその手に集中しようとした。病気、失業の中央金庫が設立された。それは一方で、この組織に相互扶助主義を導入することであり、労働者の活動にとって有害な結果をもたらした。他方で、それは中央委員会の権限の強化であり、力の増大であった」。「組合費が増大した結果、金庫が集中され、地方の多くの支部が支払いに遅れ、独立の意思表示ができなくなった。これらの組合は資金を自由にできなくなり、全ての行動で中央委員会の思うがままになった」。「極端な中央集権化であり、全てのグループは中央委員会の後見を受けることになった。……支部は中央委員会の承認なしには、ストライキを行えず、有力な組織が特定の人の手握られることになった。それがクフェルの政策によって到達された目的である」と。

この指摘は、当時のフランス労働組合運動のあり方、とりわけ革命主義的労働組合主義を理解する手掛かりを与えると同時に、それが逢着していた限界をも示すものである。既に見たように、喜安は、革命のロマン、ゼネストを志向することによる運動の発展が、労働組合の大衆化、大規模化、組織の中央集権化をもたらしたことを指摘した。書籍労連の集権制とクフェルによるその強化は運動の流れを先取りしていたと言える。今後の検討課題の一つである。いま一つ見落とせないのは、アルメルが、この過

程を「相互扶助主義」の導入として捉え、批判することである。クフェルの改良主義の要素の一つとして「相互扶助主義」があり、これが革命主義と対立していたのである。レバリュールは、クフェルが国家による労働者の境遇改善を肯定しながらも、労働者の自助努力を重視したとしているのを確認した。したがって、クフェルの「相互扶助主義」は、労働者の闘争を立法闘争に流し込もうとするゲーディズムとも対立するものであった。クフェルの改良主義を理解する上で、一つの鍵であり、今後の検討の手掛かりである。

アルメルの叙述は、さらに、クフェル個人への批判へと向かう。「中央委員会は組織の主人である。むしろ、たった一人の男がそれを指導している。中央委員会の主人はクフェルである。他のメンバーは彼の兵卒であり、彼の忠実な僕である。クフェルは彼らを掌握している。というのは、彼は長く影響力と、それに基づく特別なはからいを享受したからである」。「クフェルの政治はうまかった。ゆっくりと、忍耐強く、上手に彼の努力は中央委員会と彼自身の特権を強化することに向けられた」。クフェルの個人的野心、個人的利益追求は、検証の難しい問題である。既に見た後世の評価ではむしろ、「献身」「真面目さ」が敵対者によっても認められるとされたことを確認するにとどめよう。

さらに、アルメルの批判は、集権制への批判とともに、以下に見る現実主義政治家クフェル批判、ポジティヴィスム批判と結びついていた。「クフェルは、権力にいる人々とうまく付き合っている。諸大臣たちの扉は彼に広く開かれている。彼は全ての政府で受けの良い人物であり、大臣や長官とうまくやっている。ヴィヴィアニやミルランと交際し、フォンテーヌがトップに座る労働局や、元植字工で、ポジティヴィストでもあるかのファニョがミルランの汚れ役をしている公共事業省を頻繁に訪れる」。「この銃殺執行者政府との良い関係は、彼に多くのことを可能にする。彼のお気

に入りのための仕事や綬を得る。多くの植字工を国立印刷所に入れたり、他の人々を書籍関係の大商会の職につけたりするだけではなく、自分の功績としてこれらのポストや窓口係の長の任命権を持つ。「必然的に不誠実な人であることなしに、どのようにして思いやりのある人々につまらない骨折りができようか。彼らの害になりうる全ての行動を阻止するために手が組まれているのである」と。

ここでは、上は、大臣や労働局長官と付き合い、下は、様々な就職斡旋や、レジオン・ドヌールへの推薦に至るクフェルの幅広い活動が、黒幕的な一面として、さらには労働者の運動に対する抑圧に手を貸すものとして描かれている。当時、社会主義者ミルランの入閣は裏切りとされ、塗装工組合から労働局副局長となったI.フィナンスは組合を出世の道具としたと非難された⁴³⁾。F.ペルチエが労働局の臨時の仕事をしたことさえもスキャンダルとなった⁴⁴⁾。アルメルにとっては、書籍連盟の指導権を握り続けるクフェルが、政治家と付き合い、就職の便宜を図り、さらには労働者の運動を妨害することは許しがたいことであった。これは、後世では、黒幕的な面を強調するP.ショベも含めて、敵対者からも認められる「献身」、「真面目さ」とされる評価とは大きく色合いを異にするものである。これらの事実の再検証、再評価はあくとして、アルメルの批判の根底には、労働組合運動と現実政治とのかかわり方の問題があった。クフェルは労働者のための立法を肯定し、ミルラン入閣を認め、労働高等審議会の委員として活動し続け、その意味で現実主義的政治家の一面を持っていた。これに対して、アルメルを含む革命的労働組合主義者にとっては政府とかかわりを持つことさえも「汚れ仕事」に見えたのである。革命のロマンは様々な現実的駆け引き、妥協とは相いれないものであった。しかしながら、ジュイヤ

43) I. Lespinet-Moret, *L'Office du travail 1891-1914. op. cit.* p. 92.

44) *Op. cit.* p. 128.

ールや喜安が指摘するように、革命的労働組合主義も、これ以降、現実主義的改良を受け入れてゆくのであり、すでにアミアン憲章がその方向を含んでいたのである。当時の革命的労働組合主義と改良主義の対立点を考察する上でこの問題は焦点の一つである。その際、一般に改良主義は現実主義と分かちがたく結びついており、そのようにとらえられているが、クフェルの場合それがいかなるものであったのかが、一つの問題となる。

この政治家としてのクフェルについての記述において、政治権力との妥協、協調が批判された。経営者との協調主義も批判の対象とされる。すなわち、「彼は、階級協調、社会平和、富者と貧者が対等に協力する国を望む。彼は経営者の敵ではない。反対にしばしば、彼が雇用主の不幸な状態について嘆く。彼は、経営者組合の宴会への招待を受け入れ、彼らが労働者に対する闘争の準備をしているそのときに、友好のパンを分け合うのである」と。ただし、レベリユも指摘するように、経営者との協定は書籍労働者の伝統に根差しており、クフェルはそれを受け継いでいた可能性も検討されねばならない。

アルメルのクフェル評の最大の特徴であるポジティヴィズムに対する強い批判は以下のとおりである。「組合への政治の侵害以上に悪いことがある。それは労働者の組織を抽象的理論のための実験の場ととらえることであり、労働者の活動を予断されたことに従属させること、とりわけポジティヴィズムのようなつまらなく、あいまいで、時代遅れの理念に従属させることである」。「以前から、彼は、ポジティヴィズムの教会の信徒であり、A. コントを師とあがめ、至高存在と崇拜する怪しげな儀式に参加していた」。「この教義は、秩序、社会平和、経営者と労働者との間の協調を支持する。しかし、この協調は労働者にとって大きな欺瞞でしかありえない」。「この教義は絶対的に不寛容である。……ポジティヴィズムは本質的に権威主義であり、「能力のある人々」を信じねばならず、彼らが民衆の

群れを指導する任務を帯びる」と。

こうして、これまで見てきた、集権制と専制的指導、改良主義的現実主義、階級協調主義これら全てがポジティヴィズムと結びつけてとらえられ批判される。プル-tonは教養としてのポジティヴィズムを見ていた。レベリユーはクフェルにあってはポジティヴィズムが書籍労働者の世界と調和していたこと、ポジティヴィズムではあるが労働者ポジティヴィズムであることを強調する。クフェルの後継者であるリオションは、「彼は、労連における彼の仕事を宗教への勧誘の手段と考えなかった。彼の寛容な精神と自由主義は、組合組織のために教義のセクト主義の危険を免れることを可能にした」と指摘する⁴⁵⁾。ポジティヴィズム、とりわけプロレタリア・ポジティヴィズムがいかなるものであったのか、クフェルはそれをどのように受容したのか、また、それが彼の組合指導をはじめとする多面的な活動にいかなる影響を与えたのかは、クフェルの改良主義と彼自身の全体像を解明する上で、決定的に重要な検討課題である。アルメル批判は極論としても貴重な手掛かりを与えていると言える。

最後に、アルメルは次の記述でクフェル評を締めくくる。「クフェルの仕事は有効であった。彼は彼の職業に疑いのない貢献をした。組織のセンスがあった。しかし、今日、彼の合法主義的、保守的で政府側に立つ行動、彼の権威主義と墮落した方法は、書籍労働者と全てのプロレタリアートにとって本当の危険である」。後半部分は、ここに挙げられている事実から判断すると、1908年の「ヴィランヌーヴ・サン・ジョルジュの虐殺」に対する、CGTやパリの植字工の運動に対する書籍労連中央委員会、クフェルの妨害に起因していると考えられ、極めて手厳しいものである。とはいえ、前半部分には、肯定的評価が見られ、とくに「組織のセンス」と

45) Liochon, *La Mort de Keufer. op. cit.*

の表現は、批判的立場からであるだけに、クフェル像を再構成する上で見落とせない。

おわりに

本稿で示したA.クフェルの人物像は、直接それに言及したいいくつかの資料の検討に止まる。それは、今後の、クフェルとプロレタリア・ポジティヴィズム、書籍労連 (FFTL)、労働総同盟 (CGT)、労働高等審議会 (CST) などにおけるクフェルの活動とその改良主義に関する、我々の研究を導くと同時に、それらによってあらためて総括されるべきものである。

